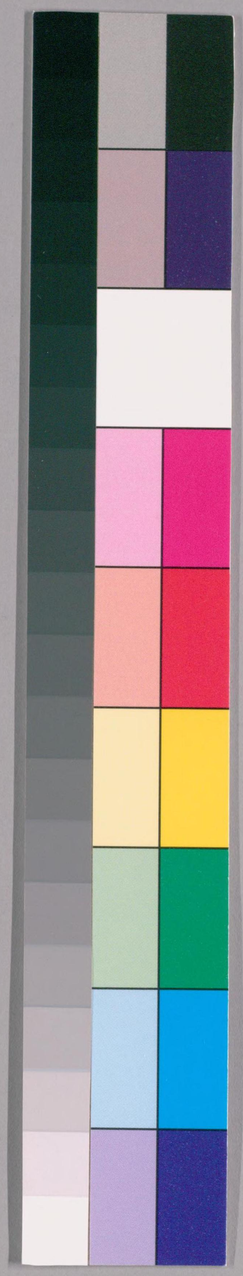
續千載和歌集

上之

853
166

函號 一ノ
書名 二十一代集
冊數 五六
類 和歌 七八

第七一三號



国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

渡邊千秋藏書

帝國圖書館藏書之印

昭和九年一月廿一日入館

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首歌奉りける
後朝
秋霧の
立ちへだつれば
朝ぼらけ
ありあけの月
さやかにも見ず

庭の面を掃き清めたる気色の
山清入道右大臣家十首
寒草
権中納言為忠

掃き清めし
庭の面に
落ちもとまらぬ
木の葉かな

百首歌奉りし時
後朝
右近大将道雅

明けぬとて
帰る道こそ
露けけれ
来し夜よりも
深き袖かな

源清蔭朝臣
歌合の
後朝
恨むとも
なほ恨めしき
明けぐれの
空の別れを
誰に問はまし

従三位範宗

煙のみ
空に満ちて
思ひ立つ
雲の上にも
昇る心は

法皇御製

閑山幽居
山の端も
遠く隔たる
ここちして
月を友呼ぶ
秋の夜半かな

後二条院御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

永承六年内裏歌合 大納言経信

和泉式部

月かげのいたらぬ里しなければ
かこち顔なる夜半の窓かな

返し

和泉のかたへ遣しける

大納言経信

有明の月はつれなくみえしかど
君し心の闇はらせば

返し

和泉式部

月かげはいたらぬ里しなければ
いつも心の闇はらせば

題不知

大納言経信

ながらへばまたこのごろやしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今ひとたびの逢ふこともがな

返し

大納言経信

逢ふことをけふを限りと思ふにも
命しらるる身こそつらけれ

題不知

和泉式部

つれづれとながめてこもる春の日を
くらすものとや人の見るらむ

返し

大納言経信

ながめこもる心のうちを思ふには
春の日くらしとかこつべしや

題不知

和泉式部

あらざらむこの世の外の思ひ出に
いまひとたびの逢ふこともがな

返し

大納言経信

あふことを今日を限りと思ふにも
命しらるる身こそつらけれ

題不知

和泉式部

つれづれとながめこもる春の日を
くらすものとや人の見るらむ

返し

大納言経信

ながめこもる心のうちを思ふには
春の日くらしとかこつべしや

題不知

和泉式部

あらざらむこの世のほかの

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

冬哥

前権僧正雅

夜もおわれ都くかうる神よあらたん

古

風ふくまゝに月澄さえ

みん

前大納言為氏

松風えや問裏ふ音奇よ暁寒

空のそらの月も影さえそふるや霜のむすぼれ

もゝすゝ

権中納言長

秋乃夜ぼのゝ月ふけ時ぬそみわれ山の雲れ白雲

院御製

初もおわるそらも月見ぬ秋山をわれ宿浪おりる

澄覚法親王

権中納言親

前大納言為世

中

津守国冬

雪時有

晴ぬ遠おぬ雪ふる雲ふ雪

冬乃夜ぬ月ふ雪ふ

風ふむこそ頼ふる雪ふ霜ふ雪

松雪軒

津守國助

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

源兼氏朝臣

前関白太政大臣

深草の竹の下道をうき雪の
ふりうすき
あり明の月のまちでてゆく山の末也
延明門院大弐

正治二年十首奉合暁雪

雲ふかき今やのぬらむ
旅雪と
ふりまさりても
山路入道左大臣家十首奉合雪

正三位為実

旅雪

前大僧正慈円

月のすむこずゑにかかる雲なくて
眺めぬ秋の夜ぞなき

九条左

おもへども心を計るものならば
秋の月をや人は見ましと

平宣時朝臣

和元百首歌、年時歳當

法印定為

さよふかき月をもめでぬものゆゑに
眺めぬ秋の夜ぞなき

題しらず

八条院高倉

眺めつる秋の夜ごとの月かげを
仁和寺二品法親王守覚

一ふしも思ひおきてぬ身なれども

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

雑躰

題不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

旋頭歌

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

萬葉旋頭哥ハ五七七
五七七ノ句ヲ初ニ
五七七ノ句ヲ添タル
廿餘ノ詩ニテモ
アルベシ

みそぎする人もあるかもおほ
なでしこが花の盛りを
見ればかなしも

折句歌

源信明朝臣

わすれ草我紐につく
ことさらに
つまとりもせじ

折句歌

貞觀院御歌

わすれ草我紐につく
ことさらに
つまとりもせじ

折句歌

貞觀院御歌

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新続古今集巻第十六 雑歌上

入道前太政大臣

みそぎして
さ夜ふけぬとや
思ふらん
ひとりぬる夜の
ねざめなりけり

前大納言

雨そそぐ
軒の松風
ふけにけり
さびしき窓の
月のかげかな

前大納言為氏

かきくもり
すさまじきまで
ふる雨に
袖のみ濡るる
五月雨の空

入道前太政大臣

忘れじと
思ひし人の
面影も
ありかたかりし
夢の世の中

津守国助

みそぎする
身をふり捨てて
ゆく水に
後頼めたる
ほどぞはかなき

入道前太政大臣

ほととぎす
なきつる方を
ながむれば
山の端近き
有明の月

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

誹諧哥

[illegible]月七日おりふし人々の許よりさ
[illegible]
[illegible]

[illegible]

寂さふるさわせの梅の花
柳営門前と云ふ心を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乳母
前大納言為世
三位知家
廉資王母

新古今 是則

後朱雀院
後朱雀院
後朱雀院

鴨のまし

和泉式部

前大納言為家

劉子云洗垢求痕吹毛索瑕傷淺章

後恵法師

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

羇旅哥

みちのくにまかりける人に餞し侍りける
権中納言敦忠

朝忠集
もろともにあはれとおもへ山桜
我た(別ま)ち(歟)ぬ(歟)春を(歟)惜(歟)しと(歟)思(歟)へ(歟)ば(歟)
同じへまかりける人の津の国小野小町

家
みちのくにまかりける人に
とことはの(に)
(も)
つれなくて過ぬる秋の数しらば
(と)
(も)
(と)
(も)
(と)
(も)

[illegible]

けり

天暦九年亭子院の御時に、菊合せさせたまひけるに、菊の花を詠ませたまひける

源重光朝臣

[illegible]

刑部卿敦敏

源重宣

[illegible]

別れ心を

園基任

[illegible]

蓮生法師

[illegible]

信生法師

[illegible]

蓮生法師

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

拝見いたしてもみてまいらせ候

猶も人々添削をこそ

家

是もまた〻鏡の影

社度拾別まも

羽賀よ淀のわたりをも

山階入道左大臣

ゆく舟のかぢの跡

前関白左大臣

前大納言公任

猶もいまだ高き心ざしを

つらをこそみ給へ

鳥羽院

山門流れ歟

ハやま

社度拾別まも

前大納言公任

浦くの末だにもれぬ

平宗宣朝臣

海路

今朝なれし旅の空

ひしらす

思ひ立ち浪路にそくる

前大納言為世

一万七

暗月とやまのくまてらる

六 つは

郭公なくなるみのを

新院御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

後拾遺和歌集 巻第十六 雑二

前権僧正公朝

寄月恋

とふ
寄月恋思ふこころをしるべにて雲井の月を猶ぞ尋ぬる

平宗直

寄道恋

かりそめの蔦蘭よりて草枕ゆくへも知らぬ旅の空かな

平貞時朝臣

寄夢恋

寝ぬ夜の夢路の関の明ぼのに逢ふとはかなき程の短さ

平貞藤

寄風恋

人しれずたのめてもなき夕暮の軒端の荻に吹く風の音

平長時朝臣

寄風恋

おもふこと有明の月の夜半の風吹くにつけても袖ぞ露けき

平貞顕

寄風恋

名にしおはば逢坂山のさねかづら人にくるよの秋風

源親長朝臣

寄風恋

吹かずとも萩の上葉はこぼれけり秋より先の秋の山風

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

猿丸心を

藤原定家朝臣

続後撰雑下 後式女
野辺の志るへを過ぬそ

中務卿宗尊親王

続古今雑下 後式女
野辺の志るへを過ぬそ

判後撰雑上 第蓮

平親時

入道前太政大臣

財吉今 禄性法学
まつまち久てくれて
君とへみそのむら
る社九まて
守足法親王家
歌合ま 移性覚宝
ふあり

今そこく久しくなりぬる
旅の空
雲すまで里れてきいうらめ
ふくもりめめ猶いもる
寒き夜の衣いそけ
百首夢中時
前関白左大臣 担家

かくもゆく
つくくと性教八語
うくうくれ

いそ乃もく松の風の
絶すす
雪の夜々ふしおく山のさ
紀淑文朝臣

約束ぬるとの野人よ宿
天津空おもふ月のみそ
大江家秀

百首夢中時
惟家恵景

苔松霜の宿々月新
旅三位資通

月をみてもろこしに我ひとり
　月前思旧
秋ならぬ心をもまた知りがほ
　玄沖門流作製
袖の露も
　独義の流
宿れば袖にやどる月かげの
　源兼氏朝臣
かたぶくまでもながめつるかな
　前参議雅春卿
ながめこし月の光の消えぬまに
　源兼氏朝臣
秋も後半つくりぬるかな

丹波忠盛朝臣　守
時しもあまたの秋ぞうかりける
　也一
つくもまで我面影のすみぬらん
　前納言定房卿家にて行治雑述
袖の涙の月を宿すは
　菊亭謙雅春
ながめこし月の光の消えぬまに
　萩原清忠朝臣
秋も後半つくりぬるかな
　観意法師
秋ならぬ心をもまた知りがほ
ひとりのこよひ山ぞまされる

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

前中納言定家

なにもかもいろかはりゆく世をよそに山のみどりを洞ぞ
ながめん

前原基行朝臣

暁の関の杜鳥なきわたるあふさかやまのあけぬなるらん

権僧成就

清見がた波の寄るとも月をみて行る人ぞ
暁猿を

惟宗光吉

秋をこめて山のもみぢの月なれや
もろこし

中原師貞朝臣

猿人の庵の嵐哀なり
苔むしろひとりなる君
洞院摂政家百首
藻壁門院少将
吹すさぶ松のあらしの外の月
賀茂重保
月ながらこれやこの世をよそにみる
弘安百首奇
前大納言為氏
月ながらすむやこの世に道ぞなき
平範貞

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

延やて宿とりある時

永元百首奉時

言の葉も及ぬ雲のうへ
までも
立渡りぬる霞の山
かな

前大納言有房

引まもる松もさはらぬ
ものゆへに
いとゞ霞める春の山
かな

伊勢

大江廣房

みるといひてちるあだ
桜のまとひつゝ
ふる雨やうらん

津守國道

霞ゐる春の山風吹とぢよ
花の
ちりなばたれか
ゆきて
とはまし

源朝長朝臣

永元百首奉時

贈従二位為子

雪中猟といふことを
よめる

引人もえこそ
ゆかね
雪中に
猟するとのゝ
跡のみ
ぞ見る

今上御製

故事

雪ふかき
ゆふべの空を
ながめつゝ
あすの
狩場の
風をこそ
まて

前中納言定家

朝

法眼宗顯

大江朝重

法眼雅圓

寂蓮法師

大和物語

源義行

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

神祇哥

建長五年住吉の社の歌合に
とよの事を講せらるゝ時
後深草院御製

おれ祈世よう久住吉の松も千世とぞ君が
御代とぞ久しき

太宰権帥為経

幾千世と久しき末を祈らんと日陰えぐさ住吉の松

前右兵衛督為教

住の江の松もそれかと見えまでに

弘安八年信濃守平時宗朝臣
追伐之時
信玄乃松も老木に成ぬれば
山下入道前右京大夫
信玄の孫を思ひやりて
そも松ぞよ付そめけむ
てし
よとよみ給ひしも誠の
信玄を偲ばれ
をへてみ給ひけるとぞ
常盤井入道前右京大夫
信玄の孫を抱ひやしなひ給ひ
て
神祇拝と云々
権中納言為前

信玄乃松も老木に成ぬれば
中納言為前
さしもふかゝりし
ひとの
この松ぞ秋ともみえぬ
色のつれ
津守国通
実右せ神代も聞かたりつたへ
けむ
跡あらそふな津守の松の
ふる木
皇太后宮大夫俊成
山下入道
信玄の孫を
この松ぞ秋ともみえぬ
色のつれ
津守国通
実右せ神代も聞かたりつたへ
けむ
跡あらそふな津守の松の
ふる木

むはの海うてくみ給ふ

前大納言為家

みるめそく松をやくむはの浦ともあつ山ふもとをも也

源為氏朝臣

五首奉

お大納言為氏

愛治や大和ことの葉毎にそ

前関白左大臣家摂政

もしほ草

津守国助

つれ河ふそ楼のふ粧

後まのうらふるとりつつ

和の浦や薄ようつもまつ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

八道前大納言為家十五首歌よ遠懐

一ともよふ花をいふふる行雨に林よ海せおふもと

春日社よりけるの平ら

前大納言為氏

澤水方いつるよりぬる秋をみまく那

前関白左大臣家

山路るの別雨そ花ようて仏ろ

とるひて思いつけ仏ろ

前僧正實聡

みる山春もとへ花ふ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

いせの海やそしほの風のかよひ路を
そとも
おもふらむおもひやるこそ
大江貞重

石清水の深谷の秋もわすれ
栄大納言師重

九重ははるかの梢の楓葉乃
秋風乃
後二條院御製

世乃あるものゝ御世に男山むかしの秋の風ぞ
百そ
吹めぐれるつゝく

法眼源兼

法皇御製

ふかき心よ秋をあさ
和元こ年仗見渡
樂

ふるさとはつゆさえ
文治六年女院入
儀式有不

やそさえまさる霜の上
天仁元年鳥羽殿
方神樂哥
高山をよめる

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

続千載和歌集巻第十

釋教哥

菩提心論曰ク漸如ム十五日圓滿無尋の

法皇御製

十住心論乃開門廣

真如親王

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

康治元年遠陽

方許

久安元年

弘法大師

観音院にそうそ

多他揭

釈尊のみもめ心風も常楽我浄とそやすめ

志賀にそ住ろ立ちをそて

苦

悲母の涙恵を垂れ我らが

大僧正明覚

如秋八月空厳細清浄光のみをそみ給

ふる

前大僧正賢栄

寄よ狂もうの狂う秋の

妙観察智の月をそ

寒暁にそうれ西の山

熱性自證三菩提

二月のや弁よるくおお

大日絶滅悲地品

現前

昌泰くれへとそれ

鳥羽院御時

三月の晦日に

前大僧正澄

一切地を

智の鏡

清浄国境常

うそ上人

心みそくんかり

和の境を拾て

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

僧覚鍐上人
寺燒うせ[て]そこもう姿を海ともる亜の佛ともる
御歌
そ[の]ゝく誰も仏と成ぬる跡ぞ哀なる法の花の色
哀なる法の花を御覧じて
この世よりのぶる理かなる梅の匂ひを
御歌
前大僧正禅助
乃[ち]世よりもちもち九[ヲ]花の色をいかゝそうへき
有空不二乃心を
法下道、我

むのまゝありとも見ゆるとの法乃二ろ行まゝ
法華経序品照于東方を
入道親王尊圓
哀のふゝく我見燈明佛本光瑞如斯
法有長羽后
普門哀[ヲ]のうちもとも沸法の花そうらん
方便品漸ゝ積功德
法眼親聆
墨深乃袖も深く梅乃匂ひ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

毋乃周忌之法華經をかうかう書て奉
のこゝろをよろこんで表紙の綺のようせ物々
二の巻のこゝろを　前中納言定家
卿まなびのあとのこゝろ
譬喩品
我心ふかの車よりけうかうたる
信解品譬如童子幼稚無識の心を
法師品
ふそくそくたいをけあをまもれのいとけなきの
藥草喩品　僧都源信

一時のよろこびに毋乃周忌之法華經
侍賢門院中納言
次八巻ハ奉書ニて
感得成仏の心をしるせり
自在房定證
いろ紙にりんさんしてしるせり
安樂行品深入經
靜かなる處をえて入
涌出品從地而涌
池水の底より蓮華

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

草繫比丘を
導化をいるる人の往
唯識論前与真如平等ことの
ことを
前大僧正良信
心清浄故有情清浄
賢攘法師
濁るをもとの心を
未得真(賛)但處
法印寛壽時

権少僧都頼鈴
久住

時やうの心乃至法
周流よ覚知一心生死永寿(弁)とのことを
法印顕後

ことく心ひとつをもとめ
後生菩提のつとめ
人々よ十如是乃至
力

前中納言定家

みるしるに法のことくの
五百弟子ら
九条左大臣女
ことくの心乃至菩提
(舟)

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

法中寂實
勸持品
壽量品
妙音品
普賢菩薩
前事如是
定賢
刑部卿
源兼氏朝臣
前大僧正慈源

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

往生要集云度諸佛
境界経云如来所現無
異功用無異惟衆生性
自見不動如十五日夜圓
浮提人各見月現在其
上月不作意我現其
上。

觀世音菩薩王宮會の心を

嘉祥元年三月廿一日 園城上人

日想觀應當專心繫念一處

夕附日入の處の一ところ 照空上人

後鳥羽院下野

乃至よ水想觀を

極樂をまさしの水面よ水をうつしてそう

前大納言為家

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨

源空上人

蓮生法師

乃至一念尓陀佛

佛開未始知方便之恩を

順空上人

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

敬来

[illegible]の[illegible]修教羽[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

おたの信良信
おさらけさよあるうひさ世のやさ
永福門院
姑をうへ初冬若松の葉をひいそさ海
江安百首奉
雑下入道前右近大
釈教の分を
兼覚法親王
前大僧正雅助

ほうへさ道をかのうらるれかまよ
江帥集後拾
永元百首奉
民部卿寂超
前大僧正慈源
かけをくさの竹後の垂れ
前大僧正範憲
いくしてひうへうさ法乃燈

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

消ぬへき法の燈そともしつる人のそれ
弘安元年百首歌たてまつりける時
僧正覚圓
当しぬへき法のともしひそかけ
入道二品親王性助
正和二年法門百首歌たてまつりける時
秋の野の草葉をわけくる露のいろそれ
秋の野よりほかの草葉
秋の野よりほかの草葉
秋の野よりほかの草葉

来宝の報をうけ
思て男よもの乃宝
もゝちに
無仕てあさ佛をう
松葉の法乃うちよ
百首分生あ一ら
紫式部
入道前太政大臣
如空上人
僧都永観
律師永観
千観法師

堀河の左大臣
分乃うち
紫乃色を折ふせ
う野の居宝のも
みく
二条法親王覚法
萩の花をみ共
覚性法親王歌
それを今よ
分乃うちみ
基俊
菅原生良朝臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

853
166

3223

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用